

2013/11/28

九州運輸局2013シンポ(大井)

1

# 地域公共交通のあり方を考える シンポジウム2013 in 九州 ～地域公共交通の元気がまちの元気～ パネルディスカッション(論点整理)

2013年11月28日

於: グランドハイアット福岡

大分大学経済学部経営システム学科 大井 尚司

2013 11 28

## 自己紹介にかえて

- 旅行会社 国交省系研究所 現職
- 研究テーマ：地域公共交通(バス・鉄道)の運営・計画・制度・組織設計、人材育成
- 2010年～ 「地域と交通をサポートするネットワーク in Kyushu(Qサポネット)」を共同運営(代表世話人)
- 大分県内、県外の地域公共交通会議委員
- 国土交通省「地域公共交通の確保維持改善事業」に関するあり方、事業評価に関する委員会
- 国土交通大学校・九州運輸局・九州内の自治体での研修、各運輸局でのシンポジウム

## 八女市 (デマンド + 幹線路線バス)

- 広域合併市町村の交通政策をどう考えるか

人口減、高齢化、過疎化: 突然自家用車に頼れなくなる  
山間部多い + 幹線鉄道がない = 効率的交通体系が展開困難  
行動パターンとネットワークの把握 → ダイヤと路線設定へ  
合併前の町村 - 中心部のバス路線の存在  
市の中心部への移動が多い (旧町の拠点もコミュニティ中心)

- 効率性と公平性のバランス

効率性: システム活用、幹線は既存バス活用、制度は単純化、予算枠は拡大しない (費用対効果を考える)  
公平性: 適正料金を取る、過度な要求排除  
バラバラな政策を一本化、路線バス + システム活用  
モードの役割を固定しない (デマンド → 観光、スクールの空き)

## 十勝バス(路線バスの維持活性化)

### ▶ 地方の利用者をどこまで発掘するかの努力

経営難→合理化→路線減 営業は皆無

→ 1つの停留所から面的に営業開拓を努力

需要への追随 → 需要の創造・囲い込み へ

高校生への利用促進→利用が社会人まで続く

最後まで移動を担保→ハイヤー・福祉輸送への展開

### ▶ 「常識」をあえて見直してみる

不便だから乗らない→実は不安(知らない)からだった

「移動」を考えるのではなく「目的」を考える

「1社の特殊事例」 「全国への波及」

## 由利高原鉄道(地方鉄道の活性化)

- ◆ 「どうしようもない」「どうにかする」へ  
負のまま受け入れ→悪循環して撤退になる  
役に立つ提案はリスク含め受け入れる経営士壌  
小さな「成功」を積み上げる：短期ではなく長期で評価  
メディアの活用 → ファン、WEBアクセス増加  
利用客数が増加(人口減にもかかわらず)
- ◆ 「地方鉄道 = 生活路線 = 残さねば」の常識？  
車 < 鉄道 → 乗るはずがない(生活は車)  
高校・病院が移転 → 鉄道なんか考えていない  
一方的に助けを求めても理解してくれない  
= 地域との連携 + 外部の力(お客、広報)が必要

## 三條市（「目的」「移動(おでかけ)」）

- **健康のために「車→歩く」を推奨するまちづくり・活性化**

小刻みにまちなかを歩いてもらうための仕掛け  
社会的つながり(コミュニティ維持)に移動を利用  
(背景) 医療費、自治(社会)活動に高齢化が支障  
イベントの性質をどうするかは鍵  
大都市ほど病気の罹患率が低いことの遠因？

- **まちなかに連れ出すためのリソース活用**

デマンド利用→病院目的に集中、買い物少 = バス化の検討  
「マルシェ」、朝市の活用、生きがいの場づくり(道場など)  
→ 街なかに「楽しい場所」を増やして交通利用、健康増進

## 全体に共通するポイント(要点整理)

- 地域の特性・ニーズ・リソースの丹念な把握  
「3つのマ(テマ・ヒマ・オジャマ)」の実践  
今あるリソースの活用が考慮されているか  
効果の把握・情報の提供: 「見える化」するための工夫
- 地域のQOL(生活の豊かさ)を上げるスパイラル  
費用負担の減少、移動体系の明確化  
= 生活に交通が使えると認識→生活・地域に「価値」が  
成功体験をすれば地域(事業者)も元気に(表彰など)
- 「常識」「交通」「移動」に限定して考えない  
デマンドシステムを安否確認にも使える  
事業者の常識 = 利用者の非常識、の改革  
「目的」「主体」をベースにした営業、という発想

## 課題(後の内容につなげて)

- 交通に関する制度・政策の転換点を迎えて  
各主体の考え方がどう変わってきたのか  
他の政策・目的地・用務・組織・モードなどとの連携  
「目的」をどう作り出すか ニーズにどこまで応えるか  
担い手減少への対応(事業者、自治体、運営の人材)
- 「高齢者」「交通弱者」の次の展開  
ひとくくりにはできない高齡化・少子化とニーズの変化  
どのような社会を到達点としていくのか？  
高齢者の「病院」目的はいいのか？  
「アクティブ・エイジング」へ向けた公共交通のあり方